



さあ、冬休み 有意義な二週間を！

長かった2学期もいよいよ終了です。今年は、新型インフルエンザにより行事も中止になったりして残念でしたが、子ども達は、さまざまな活動を通して、かけがえのない思い出を作ってくれたのではないかと思います。

さあ、冬休みの始まりです。年末年始と言うことであわただしいと思いますが、この時期こそ家族の一員としての自覚を子どもたちに持たせ、心を育てる良い機会だと思えます。大いに仕事を受け持たせ、少しぐらいうまくできていなくても大いに認め、責任を持ってやり遂げることの充実感と大切さを学ばせたいものです。充実した休みとなりますよう、子どもたちへのご助言・ご指導をよろしくお願いします。



今日（22日）は冬至。太陽が最も南に下る頃です。昔の人は、これから次第に太陽が高くなるので、この日を「一陽来復」と言い、南瓜を食べ、柚子湯をわかすことを習わしとしてきました。今夜は、南瓜を食べ、柚子湯に入るご家庭があることと思えます。日本の古い習慣は、それなりに良いところがあり、大事にしたいものです。

ところで、幕末の歌人で国学者に橘曙覧（たちばなのあけみ）がいます。橘曙覧は、福井県出身ですが、中央の歌壇と交わることなくひっそりと一地方の歌人として生涯を送り、国を愛し、平和を尊び、家族を愛した人でもありました。

その歌の特徴といえば、日常生活に題材をとり身近な言葉で詠んだことです。特に、「独楽吟」と呼ばれる「たのしみは」で始まり「のとき」で終わる短歌はわかりやすい言葉でストレートに日常の様子を詠っています。

「たのしみは まれに魚にて児等皆が うましうましと いひて食ふ時」

「たのしみは 機織りたてて 新しき衣を縫いて 妻が着する時」

1994年に、天皇皇后両陛下のご訪米の歓迎式典で、クリントン大統領が「たのしみは 朝起きいでて昨日まで なかりし花の咲ける見る時」と歓迎スピーチの締めくくりをしたことで、曙覧は一躍脚光を浴びることになりました。

ぜひ、皆さんも、「たのしみは」で始まり「のとき」で終わる短歌を詠んでみられてはいかがでしょうか。きっと、前向きな思考が自然に身についていくことと思えます。

間もなく今年も終わります。この1年を振り返ると、

「ふり向けば 曲がりし 下駄の 爪の跡」

（一生懸命にまっすぐ歩いて来たつもりですが、右に左にフラフラしていたのだと思われます。）

「ふり向けば おかげを受けし 人ばかり」

（この一年、多くの保護者の方や地域の方々にお世話になりました。ありがとうございました。）

Photo News

フォトニュース



名古屋港見学（5年）



秋のフェスティバル（2年）



近江だるま（6年）

保存会の方に教えていただいて、それぞれの力作ができました。



秋のフェスティバル（1年）

幼稚園のお友達を招待する予定でしたが、インフルエンザで中止になりました。そこで、1年生だけで楽しみました。



キャッチコピーコンテスト（4年）



昔の道具（3年）

南小の先生たちに教室に来てもらって、社会科の授業で昔の道具について勉強しました。少し、緊張しました。